


 ずいそう

国際化の課題

江崎哲郎



国際化は我々に課せられた大きな課題である。政治、経済、社会、学術にわたって、また政府レベルではもちろんのこと大学、企業、自治体などにも、国際化という大小そして様々なスペクトルの波が島国日本に押し寄せている。私は長年勤めた大学を昨年退職したが、このような国際化が始まったのは、1980年代中曽根内閣の国際国家日本というスローガン以来である。比較的最近のことともいえるし、その後なかなか対応できていないともいえる。大学では、その頃から国際的な協定締結、それに基づく交流活動、留学生の受け入れが積極的に進められるようになった。留学生は83年に1万人に達し、次いで留学生10万人計画が進められた。学問分野としての土木は必ずしも国際化が進んでいないと思っているが、幸いなことに私は多数の優秀な留学生、海外の研究フィールドや共同研究者に恵まれ、欧米4カ国を含む14カ国の研究者と共著論文を執筆したり、海外の研究機関に定期的に院生を送り出すなど、この国際化の流れの中で何とか研究活動を展開することができたと思っている。しかし英語力や国際感覚の欠如した典型的日本人の一人として常に苦しみと反省を繰り返してきたことを白状しなければならない。

最近では独法化された大学は、留学生30万人計画、英語による教育、COEの形成など大学間の競争の中で襲いかかる国際化の波に対応しようとしている。国際化は本来先進国家への発展過程であり国際的地位の向上など夢と希望に満ちたものはずだが、現役の先生方には大きな負担となっている。OBとして気の毒にすら思われる。官民においても閉塞感の強い社会情勢の中で、国際化に付きまとう国際基準などは、その用語がアルファベットからカタカナに定着していく過程で多大な負荷があるようで担当者の厳しい表情がいつも印象に残る。まさに黒船の再来に振り回されている感である。斯くして国際化に関する施策は各所で多彩なメニューが揃い予算も潤沢なようである。しかし、国際化の目標は？ どんな国際社会をめざすのか？ そもそも国際化とは？ このような極めて根本的なことについて普遍的な共通認識が少ないように思われる。

まず、欧米語で国際化とは、internationalizationであり、領土などを国際管理下におくという意味である。古くは植民地統治の方式であり、ときには localization

すなわち先進国のやり方と同じようにさせることを指す。要するに先進国には国際国家日本を目指すといった国際化は存在しない。その日本の国際化には2つの側面がある。ひとつは欧米先進国と対等にキャッチアップするため、もう一つはアジアを中心に途上国の発展や生活水準の向上に寄与しながら信頼関係を築こうとするものである。明治の開国以来西洋に学びながらも、自国語で学術や文化を展開して日本独自の「国のかたち」を築き、戦後の目覚ましい復興と経済成長を驚異と賞賛の目で見られるわが国のこのような国際化は当然の成り行きである。しかし他方で何か事があるたびに、他国から批判を浴びていることは、語学力などともに真に再検討すべき重要事項と考える。

国際社会は異質の文化や歴史、伝統を持つ国々から構成されているので、国際化には偏見や先入観抜きに相手の立場を認め、ときにはその違い、特異性を受け入れる意識の変革が求められ、そういったことが当たり前、日常のこととならねばならない。単民族の同質社会に慣れ親しんできた日本人は同質の仲間に親しみと安らぎを覚え、海外の文化や人々の異質性に興味はあっても身近に係わりあうのには抵抗があり、ときには排斥する傾向が散見される。豊か過ぎる社会の中で傲慢さや誤った優越意識もみられるが、等身大に相手を見るアジア人としての視点が求められる。また、最近海外に出る留学生が減少するなど、若い人の内向き指向、閉鎖性が指摘されている。米国で博士を取得する日本人は中国の20分の1、韓国やインドの10分の1以下であり更に減る傾向だという。関係諸兄には失礼かもしれないが、この内向き、閉鎖性は、中国に対して相変わらず「採算が合わない」「技術を盗まれる」と主張される企業経営者の態度とも無関係とはいえないように思われる。

国際化は、人間の心や精神が真に開放され、経済や物流のように国境のない世界になることが最終目標である。日本の常識は世界の非常識といわれる中身に気付き、多様性を受け入れ、長期的視点から自らの考えを発信できる人材を数多く育成することが国際化の課題解決の第一歩ではないだろうか。